

ふるさと

第 18 号



ふるさと・夏祭り

～ふるさとの渋谷・鹿児島おはら祭～

目 次

第5回(平成28年度)定期総会	(1)
講演:登戸研究所は何をしたか	(2)
江戸の文芸・歌舞伎	(7)
巨大ムカゴの話	(10)
ふるさと渋谷のおはら祭	(12)
松姫～勁草のごとく～	(13)
【連載】隠岐流人秘帳(その8)	(17)

発行:2017年7月15日(第18号)
発行:麻生ふるさと交流会事務局
担当:平塚 征英、横田 彰夫

麻生ふるさと交流会

表紙写真：茂木 弘 さん
タイトル：ふるさと・夏祭り
～ふるさとの渋谷・鹿児島おはら祭～
撮影月日：2017. 5. 21
撮影場所：渋谷道玄坂・文化村通り
記 事：私のふるさと・渋谷と妻の
ふるさと・鹿児島(奄美)の【おはら祭】
のワンショットです。

「麻生ふるさと交流会」ホームページ
<http://web-asao.jp/hp2/asao-furusato/>

平成29年度・第1回麻生ふるさと交流会

場 所:麻生市民交流館 やまゆり

日 時:平成29年4月15日(土)

13時30分～17時00分

参加人数 33名、懇親会参加 30名

第1部 麻生ふるさと交流会 第5回定期総会 (13:30～15:45) 司会 辻村副会長 【敬称略】

1. 開会の辞…辻村副会長

- ◇ スケジュールの案内
- ◇ 松本会長がインフルエンザのため欠席
- ◇ 会員数 67名です。本日の出席者数31名、委任状21名で、会則により総会は成立。



2. 議長挨拶…辻村副会長が代行

- ◇ 麻生川の桜も葉桜になりました。
- ◇ 今までの4年間の交流会で、出身地別の自然・歴史・文化・観光などを含めた発表があり、麻生ふるさと交流会は益々充実してきております。
- ◇ この地に住み会員の皆様が、充実した毎日を送ることが出来れば、この会の意義があるものと思えます。

3. 平成28年度 活動報告…宮本事務局長

- ◇ 活動報告一覧表で報告しました。
- ◇ 総会と4回のお国自慢発表会の計5回のイベントと、秦野市県人会の集いへの参加など。

4. 平成28年度 決算報告及び監査報告…吉田会計担当・白石会計監査担当

- ◇ 収支決算報告書に基づき説明が、吉田会計により行われました。
- ◇ 白石会計監査から監査報告が行われ、拍手多数で承認されました。



5. 新年度運営委員の選出…事務局

- ◇ 新運営委員の推薦を募りましたが、立候補者がなく、今までの運営委員が引き続き継続することが承認されました。

6. 平成29年度 活動計画…配布資料について宮本事務局長が説明。

7. 平成29年度 予算計画…配布資料について吉田会計が説明。

8. 質疑応答…特になし。

9. 会歌「ふるさと」を日下部さんのリードで合唱しました。

講師の到着が遅れたため、宮本さんと平塚さんにより、「ミニふるさと自慢・茨城県版」で、いま旬の「横綱稀勢の里」とNHK朝ドラ「ひよっこ」で盛り上げました。



第2部 外部講師による講演(司会:辻村副会長) 14:20～15:20

“登戸研究所”は何をしたか～科学者の戦争協力の問題～ 【講演要旨】

…近藤 昭二 様(ジャーナリスト)

1. 登戸研究所とは

登戸研究所は、旧日本陸軍が秘密戦争兵器の研究開発基地のために設置した研究所である。その存在は日本国民に秘密にされていた。正式名称は第9陸軍技術研究所である。

第一次大戦時、ドイツは科学技術を駆使して、空からの爆撃、塹壕を破壊する戦車など、当時としては非常に新しい兵器を戦場に投入した。毒ガスもその一つである。1925年ジュネーヴで国際会議が開かれ、毒ガスと細菌兵器禁止をうたうジュネーヴ議定書が出された。日本は批准をせず、逆にそれほど有効な兵器なら使ってみたらどうかと、化学兵器開発の方向へ進む。

登戸研究所で研究され開発された兵器は、主に諜報工作員用武器と、毒ガスと細菌兵器という無差別大量殺戮兵器であった。細菌兵器は、鉄資源などが乏しい日本にとって極めて安上がりの兵器である。

1950年、明治大学が登戸研究所の敷地の一部と建物を取得。生田キャンパスが開設された。研究所の建物の一部は現在「明治大学平和教育登戸研究所資料館」として保存されている。



2. 登戸研究所の組織体制

登戸研究所は総務課と4つのセクションで構成されていた。

(1) 第1科

当初は、電波を利用した人体攻撃兵器や、レーダーなどの研究開発を担当。怪力光線、無音銃などがあった。

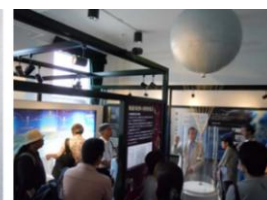


戦争末期には風船爆弾が開発された。風船爆弾は当初、対ソ戦で使うために開発された。ノモンハンでの苦い経験から、ソ連兵の背後に気球に乗せて兵隊を送り込む作戦が考えられていたのである。

風船爆弾は、和紙をコンニャク糊で張り合わせて作った気球に水素ガスを注入し、太平洋をジェット気流に乗せて、気球に吊った爆弾をアメリカへ運ぶもの。

茨城県や千葉県の海岸から放たれ、そのうちの一発がロスアンジェルス公園に着弾。遊んでいた子供と牧師さんが亡くなっている。その場所には記念碑が建てられている。米軍の軍医が直ちに飛んできて、細菌を積んでいるのではないかと調べた。

戦後、その時の軍医が731部隊を調べるために日本にやって来た。



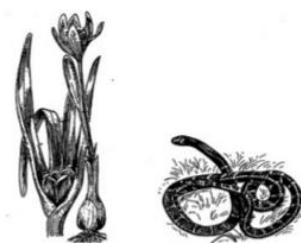
(2) 第2科

生物兵器、毒物兵器やスパイ機材等を開発した。

生物兵器は敵国の動植物に打撃を与え、敵国民の戦意を喪失させる目的で使用される。実をつける前に麦を枯らす黒穂病菌、動物用の炭疽菌、馬鼻疽菌などがあり、毒物兵器には毒蛇や毒草などの毒物を合成した物や青酸化合物などがあった。

細菌や毒ガスなどの生物化学兵器は、龐大な資金がかからず通常兵器よりも広範囲にわたっての殺傷力、致死率が高い。細菌兵器は一発打てば被害はどんどん増えていく。培養も生卵一個に腸チフス菌を入れておけば増殖する。731部隊ではひと月に30キロも菌を作った。

1944年7月にサイパンの守備隊が玉砕する。なんとしても奪還したかった軍部は、決死隊によってペスト菌をサイパン島にばらまく作戦を立てた。服部卓四郎のもとで朝枝繁春参謀らが立てた奪回作戦は、瓶詰のペスト菌を持った兵隊による特攻作戦で夜桜特攻隊と名付けられた。特攻隊はサイパンへ到達する前に撃沈された。



毒草イヌサフランと毒蛇

ロシアのラベルが付いたカニ缶で蓋を開けると爆発する缶詰爆弾などが作られた。毒針が飛び出す万年筆などは、中野学校の諜報員に使わせるためのものであった。



戦後、登戸研究所の存在が知られるようになったのは、昭和23(1948)年1月26日に起こった帝銀事件である。16人が毒物を飲まされて12人が亡くなった。使用された毒物は遅効性の青酸ニトリルである。即効性だとすぐにばれ、犯人の身に危険が及んで諜報工作に都合が悪い。

青酸ニトリルを開発したのは第2科である。元研究員に取材した際、帝銀の毒薬はうちから出たものだと言っていた。先日、東京地検で湯呑茶碗の実物を見たが、欠けたのもあったが普通の茶碗だった。

(3) 第3科

偽札や偽造パスポート、偽文書を印刷した。造幣局の人間などが来て作業をしていたが、偽札は中国大陸でばらまいて経済攪乱を起こすため偽札で中国の物資を買ったりするのだ。

3科で偽札作りに従事した人間は、戦後、印刷会社を立ち上げた者が多い。そのうちの一人に当時の偽札を見せてもらった時、偽札と本物の見分け方を聞いたが、蒋介石が作った本物の札より精巧にできているのが偽札だと言っていた。



(4) 第4科

第1科、第2科での研究開発した兵器の実験、製造、管理、補給、指導にあたっていた。

3. 731部隊について

731部隊の兄弟部隊である中支那派遣軍防疫給水部は、登戸研究所と上海の特務機関と一緒に人体実験を行った。表向きは防疫給水の名の通り、兵士の感染症予防やそのための衛生的な給水体制の研究を主任務とするとしたが、実際は細菌戦に使用する生物兵器の研究、開発、実験機関であり、人体実験や生物兵器の実戦的使用を行っていた。

元関係者に取材した際、ガラス張りの部屋にマルタ(被実験人間)を入れてガスを注入し、経過を見るために動画や写真をとったりしたが、マルタは苦しんでガラスをひっかいて死ぬから、爪の中にガラスの粉がいっぱい詰まっていたと語っていた。

4. 敗戦後の登戸研究所

昭和20(1945)年8月15日、陸軍省軍事課から、特殊研究に関する全ての証拠を隠滅せよとの命令が極秘に出された。関係書類や実験器具が焼却・埋設処分されて、徹底的に証拠隠滅作業が実施された。

GHQによって登戸研究所が接收された後、関係者は尋問を受けたが、実際に戦犯指名を受けた者は一人もいなかった。アメリカ軍への情報提供を条件に免責されたとされている。その後、登戸研究所所員たちは米軍への技術協力を行い、朝鮮戦争やベトナム戦争にも関与したという証言もある。

戦後の日本を統治するためには、アメリカは日本の天皇制を維持する必要があった。将来的にはソ連と戦うことを想定した米国は、731部隊の研究資料がソ連の手に渡る事を望まなかった。

昭和天皇や細菌戦の責任者に対して、戦争責任を追及しないことを条件に、731部隊の全ての研究資料を米国に渡すという密約のもと、資料は米国に渡ったのである。

5. 終わりに

人道上、あるいは国際法規上重大なる問題を有するこのような戦争の実態を直視し、戦争の本質や戦前の日本軍が行ってきた諸活動を冷静に認識して、後世に語り継いでいくことは、平和社会建設のために必要不可欠なことである。

現在、特定秘密保護法やテロ等準備罪などが決められていく一連の流れを見た時、かつての戦争への道を、今また進んでいるがごとき危険性を感じる。特定秘密保護法は戦時中の軍機保護法、治安維持法に通底するものがあり、戦争への道筋と非常によく似た状況となっている。

防衛省は大学や研究機関を軍事研究に取り込む「軍学共同」の動きを強めているが、これは登戸研究所を設置した当時と全く同じ状況といえる。防衛装備庁は、軍事技術に関する研究助成制度である「安全保障技術研究推進制度」を2015年に創設した。この制度の狙いは、防衛装備(兵器・武器)の開発と高度化のために、大学や研究機関が持つ先端科学技術を発掘し活用することにある。

2015年度に3億円の予算規模で始まったこの制度は、2016年には6億円に増額され、2017年度においては当初の30倍超の110億円になっている。学者は知的欲求を満足させるためには労を惜まず、自身の研究を認知されたいとの思いで邁進する。そのためには多額の研究費が必要となる。本制度によって大学・研究機関や科学者が軍事研究に取り込まれてしまうことが強く懸念される。そのへんのところを、今後は注意深くみていかなければならないと思う。

【講師のプロフィール】

1941年名古屋市出身。元テレビ朝日報道局報道センター特報部ディレクター。現在はNPO法人731部隊・細菌戦資料センター共同代表として、歴史事実の発掘・広報、中国の被害者支援につとめている。

永山則夫事件、連合赤軍事件、よど号ハイジャック、徳島ラジオ商再審事件、イエスの方舟、グリコ・森永事件、薬害エイズ、オウム・サリン事件、在日慰安婦訴訟、酒鬼薔薇聖斗事件、和歌山毒物カレー事件など1960年代後半以降、重大事件のほとんどを現場で取材した。

「ザ・スcoop」「驚き桃の木20世紀」などの制作に携わり、フリーとなってからは「NHKスペシャル」など各局の番組制作に参加。

主なテレビ作品:『今も続く細菌戦の恐怖』『声く吉展ちゃん事件の取調べ録音テープ』『731細菌戦部隊』『地獄の恋 在日慰安婦の慰安所追跡』映画脚本:『ロケーション』『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』『ニワトリはハダシだ』

著書:『今、明らかになる! 衝撃犯罪と未解決事件の謎』『捜査一課謎の殺人事件簿』『公開捜査 消えた子供たちを捜して!』『誰も知らない死刑の裏側』『モーツァルト99の謎』等。

訳書に『死の工場—隠蔽された731部隊』があり、編著に『CD-ROM 版731部隊・細菌戦資料集成』『日本侵華決策史料叢編』(中国出版)がある。



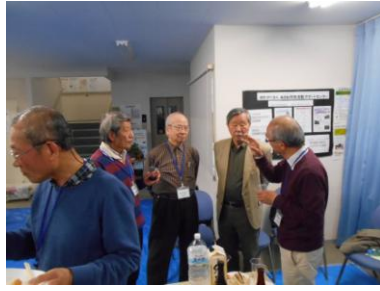
第3部 懇親会(15:50～16:45)

- ◇ 懇親会の司会は新井さんにお願いし、乾杯の音頭は宮河さんにお願いしました。
- ◇ 次回7月15日に講演をお願いしている カンディンスキー・美帆子さんの挨拶。
- ◇ 今回入会された出口さんの挨拶。

今回も多くの方々から、有難い差し入れを沢山頂きました。有難うございました。

日本酒(富士錦・加賀鳶)・宮古島古酒・琉球王朝、あごくん・うなぎチップス
・栄川の地酒漬け・ほや各種…宮本・鈴木・與那覇、宮本・宮河・平塚さん





江戸の文芸 歌舞伎 芝居と役者

大井 敏夫

若衆歌舞伎が禁じられた後は大人の男のみに依る歌舞伎になりますが、庶民の人気となるのは江戸で市川團十郎の荒事、京都で坂田藤十郎の和事が評判を呼んだ元禄(1688～1704)の頃からです。又、京都で「芳澤あやめ」が女形の芸を確立した事で其の人気は確立されました。

世に千両役者と言いますが、初代芳澤あやめが正徳元年(1711)に千両超、同年に二代目市川團十郎が丁度千両の給金を取った事に依ります。

二代目市川團十郎が享保六年(1721)に千両と言う記事も有りますが、通常は芳澤あやめが最初の千両役者と言われています。



初代芳澤あやめ(1673～1729)は遊女を演じる傾城事を得意とし三都随一の名女形と言われ、正徳十三年から一年間江戸へ下向しています。

芳澤あやめは五代目迄続き、二代目は初代の長男、三代目は初代の四男、四代目は二代目の養子、五代目は三代目の子です。

市川團十郎は歌舞伎界で最も著名な名ですが、初代(1660～1704)は役者堀越重蔵の長男で初め初代市川海老蔵を、後年初代市川團十郎を名乗っています。

又、父親の重蔵は甲州出身の侠客で「面疵の重蔵」「弧の重蔵」と呼ばれ、甲州から下総に移り成田山新勝寺の近く幡屋に住んだ処から、團十郎は屋号を「成田屋」としたとも言われます。

最も有名なのは七代目(1791～1859)で歌舞伎十八番を制定し、市川家の芸を確立しますが、時代は松平定信に依る寛政の改革期で、其の華やかな生活、舞台上で本物の刀や鎧を使用した事を咎められ、江戸処払いに処されました。

明治期には九代目(1838～1903)が尾上菊五郎、市川左団次と共に団菊左時代を築きます、十代目は役者では無く死後に追諡されます。十一代目は七代目松本幸四郎の長男、次男が八代目松本幸四郎、三男が尾上松緑です。

元禄は其の後に創作された歌舞伎の代表作である「仮名手本忠臣蔵」の時代です。

此の事件は江戸の庶民の話題としては格好の事件で、吉良邸に討ち入りした46人が切腹した元禄十六年(1703)二月四日の僅か12日後に、此の事件を題材にした「曙曾我夜討」が江戸中村座で上演されています。

三年後の宝永三年(1706)には近松門左衛門作、浄瑠璃「碁盤太平記」が大坂竹本座で上演されました。此れは軍記物語「太平記」の仮託で、塩冶判官(浅野内匠頭)、大星由良之助(大石内蔵助)、高師直(吉良上野介)等の名が出ます。

集大成として45年後の寛延元年(1748)に二代目・武田出雲、三好松洛、並木鮮柳の合作、人形浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」が演じられ、同年十二月(1749年1月)には歌舞伎として上演されています。

「仮名手本忠臣蔵」は其の後繰り返し上演されますが、其の都度大当たりした為「独参湯(気付け薬)」と称される事になります。

仮名手本は寺子屋等で使われた手習い書の一つである「仮名」の手本、仮名は47文字ですから四十七士に掛けた事、蔵は忠臣が詰まっている事、又大石内蔵助の内蔵に掛けたものです。

市川家の代表演目で最も上演回数が多いのは「助六所縁江戸櫻」です。

歌舞伎の形式上「曾我もの」と言われ、侠客の助六・実は曾我五郎、白酒売り・実は曾我十郎の設定です。

助六のモデルと考えられている人物が三人居るそうです。

- ① 江戸浅草の米或いは魚問屋の若旦那、大捌助六、或いは戸澤助六。
- ② 京、大阪で男気を以て名を馳せた侠客。
- ③ 江戸蔵前の札差で気前の良い文化人として知られた大口屋暁雨。

大口屋暁雨は実在の人物で寛延(1748～1751)から宝暦(1751～1764)年間に芝居町や吉原で豪遊し、粋を競った18人の通人、所謂「十八大通」の一人です。

暁雨は俳名で実名は治兵衛、二代目・團十郎の鼻筋筋だった事から二人は親交を結び、暁雨は吉原で「今助六」と呼ばれ悦に入っていたとの話が有ります。

「助六」の名が最初に舞台に出

て来たのは、正徳三年(1713)山村座で演じられた「花館愛護櫻」(はなやかたあいござくら)で、二代目・團十郎が演じています。

「助六所縁江戸櫻」の題目は文化八年(1811)市村座で、七代目・團十郎が演じています。



江戸歌舞伎が最盛期を迎えるのは天明(1781～1789)から寛政(1781～1801)の時代で、市村座に中村仲蔵と言う役者が現れました。中村仲蔵(1736～1790)が仮名手本忠臣蔵の五段目で、斧定九郎を演じて大評判になり、「仲蔵ぶり」と言う言葉が残ったそうです。中村仲蔵は江戸浪人の子とも渡守の甥とも言われ、門閥外から苦労して名を成し写実的な芸風で知られます。

其の外にも四代目市川団蔵、五代目松本幸四郎が出て「生写し」と言う芸風で人気を呼びました。「生写し」と言うのは写実的な芸風の事で、四代目市川団蔵(1745～1808)は大阪で修行し其の芸風を追及していました。

五代目松本幸四郎(1764～1838)は初代中村仲蔵に師事し、悪役を得意としていました。脚本作者の鶴屋南北(1755～1829)の敵役の大半は、此の五代目に当てゝ書かれています。

歌舞伎は明け方から始まり夕暮れ頃迄、約半日に亘り演じられますが、現在の相撲と同様に初めから終わりまで観る人は居ません、相撲が序の口、或いは新序から始まるのと同様に、開演直後は新人稽古場の様なものでした。

歌舞伎の興行は十一月の顔見世から始まります。其れが新しい一座のお披露目で有り、其の顔ぶれを告知する「顔見世番付」は一枚一分の高値でしたが、其れが知れ渡ると十二文程に下落した様です。

顔見世に始まり、正月の「初春狂言」、続いて「弥生狂言」「皐月狂言」七月の「盆狂言」九月の「お名残狂言」が略一年の目安でした。

江戸では「初春狂言」を最も重視して、曾我兄弟の仇討ちを扱った所謂「曾我物」と決まって居り、奥女中達の宿下がり当て込んで「弥生狂言」が人気を得ました。

後代、夏場は上級の役者が休みを取る為に安値の土用興行となり、客足が遠のく為に「怪談物」が流行ります、其の代表が「番町皿屋敷」「東海道四谷怪談」です。

江戸では小屋の所有者が興行権を握り、「太夫元」と称し大きな権力を持ち、其の下に「張元」が実際の運営を行います、太夫元に継ぐ権限を持つのは出資する「金主」と呼ばれる者でした。

文化文政の時代、中村座の金主であった大久保今助は、芝居知らずですが其の多忙さから好きな鰻を食べに行く事が出来ず、蒲焼を丼飯に乗せ冷めるのを防ぐ鰻丼の発明者との説が有ります。

鰻丼に就いては下総の渡しで鰻を食べようとした折、丁度渡し船が出てしまう為に、丼に蓋をして舟に持ち込んだ事に由来するとの説も有ります。

歌舞伎役者は役柄に依り呼び方が変わりますが、男役では「立役」「敵役」「若衆方」「道化方」「親父方」等、女役では「若女方」「花車方(年増・老女)」等が有ります。

時代を経るに従い、戯曲内容の複雑化と共に役柄の分化が進みました。

役柄に依り楽屋での場所も異なります。表向き三階建ては禁止されていたので、実質的な二階である中二階には「女方」が、其の上の三階に「立役」が占めて居ました。一階は稲荷を祀り、「稲成町」と呼ばれた部屋には、最下級の立役が、「囃子町」と呼ばれた部屋には囃子方が居ました。



楽屋の三階には座頭や立役等の部屋があり、鏡台や小道具の置かれた部屋で、出番に備える役者や一杯やり、寛いでいる役者達が描かれている。歌川豊国画「江戸芝居三階の図」東京:たばこと塩の博物館蔵

役者間の階級も厳しく、「立者(名題役者)」「間中」「中通り」「稲成町」「色子」の区別が有り、色子は最下級の女形で芝居町付近の陰間茶屋との繋がりも有った様です。

明け方、未だ客の来ない時間帯の「序開」が稲成町に依る寸劇、続く「二立目」が間中、「三立目」からが実質的な序幕になります。

情報源の少ない江戸時代は歌舞伎役者の装いは流行の大きな要素でした。

江戸後期、女形の二代目瀬川菊之丞は、舞台上演じていた折に帯が解け、咄嗟に舞台上で結んだ形が評判となりました、菊之丞は「路考」と言う俳名を持っていたので、其の結び方を「路考結び」と言います(路考結びは太鼓結びの原型)。

菊之丞は其の外にも流行を生み、髪型の路考鬢、路考櫛が有りますが舞台衣装から流行った「路考茶」は其の後も長く流行りました。

色の流行りは市川團十郎が演じた「暫く」の衣装から「團十郎茶」等、模様としては初代佐野川市松の舞台衣装から「市松模様」、三代目尾上菊五郎の「菊五郎格子」、三代目中村歌右衛門の俳名「芝翫」から「芝翫縞」等、流行の発信元になっていました。



路考結

巨大ムカゴの話

平塚 征英

昨年12月頃に友人から巨大ムカゴを貰いました。普通のムカゴは大きくても2～3cmですが、これは10cmもの大きなものです。紙袋に入れたまま放置しておき、3月～4月頃に芽が出てきたら、土に埋めるようにとのアドバイスがありました。

本棚の片隅に置いたままにして忘れていましたが、4月中頃にふと気が付いて、袋から取り出してみたら、既に芽が出ていました。

これは急いで植えなければ！ 誰にお願いしようかと考えましたが、シニアの会運営委員で知り合ったSさんをお願いすることにしました。5月連休の3日にお宅にお邪魔し、近くの畑に行くと、畑には自然薯やムカゴも植えておられるので、巨大ムカゴだろうが同様な事と一安心しました。

ツルが出てきたら這わせるための支柱も準備してくれて、1個を植えるだけでしたので、10分間ほどで作業は終わりました。

ついでにタケノコも掘って、車でないと運べない位沢山のタケノコを頂戴しました。ご近所にもお裾分けが出来て、家内も大喜びでした。

ムカゴとは、腋芽が肥大化して小さな球根になったものです。ムカゴが出来る植物は、ヤマノイモ類が有名ですが、オニユリやシュウカイドウなどにも出来ます。日本で栽培されるヤマノイモ、ナガイモなど多くのヤマノイモ類の場合は、直径1～2cmほどの球形のムカゴができ、これを播いて新しいイモを育てますが、そのまま食用にします。ムカゴごはんや塩茹でムカゴなどです。



ヤマノイモのムカゴ



オニユリのムカゴ



シュウカイドウのムカゴ

巨大ムカゴをネットで検索すると、色々とヒットしますが、通販もやっているようです。

【巨大ムカゴ】～ネットより～

直径10cmを超すような巨大なイモ？が空中にぶら下がる不思議な植物があります。

この植物はヤマノイモの仲間で、ムカゴが巨大に発達したもののなのです。空中に馬鈴薯が実っているような感じなので、英名では air potato (エアーポテト) と言います。この巨大なムカゴが出来るヤマノイモは、学名を *Dioscorea bulbifera* と言い、熱帯アジア～熱帯アフリカが原産です。

最近、この巨大ムカゴの本種が、その珍奇性でもてはやされて、少し出回るようになりました。英名の通りエアーポテトの名で流通しています。但し、一部では宇宙イモの名でも出回っているようです。



下の写真は私が貰った巨大ムカゴの写真です。



4/22 上面を撮影



5/3 上面(左)と側面(右)・・・10 日間で芽がかなり伸びた。



自然薯の植え方と同様に5cm 位の深さになるように、また、太い芽が2本出ている側面を上にして植えました。



巨大ムカゴを植えた。



のどかな風景！

収穫は 10 月過ぎのようですが、それまで何度かお邪魔して、状況を記録したいと考えています。

<6/3 状況> 1ヶ月後

ツルが左巻き、葉の出方は互生、葉の形はハート形でクビレがない。⇒ヤマイモ類では無い？



ツルは左巻き、葉は互生



葉の形はハート形



同じ畑の自然薯。ツルは右巻き、葉は対生で形はクビレがある

<7/2 状況> 約2ヶ月後

2本のツルが2m支柱の上端まで伸び、更に水平に広がり始めた。



巨大ムカゴのツルと葉



同じ畑の自然薯栽培

ふるさと渋谷のおはら祭

茂木 弘

私のふるさと・渋谷と妻のふるさと・鹿児島(奄美)のお祭り「おはら祭」を紹介します。

【渋谷・鹿児島おはら祭・公式サイトより】

「渋谷・鹿児島おはら祭」は、毎年5月中旬の土日に、渋谷109前を交通止めにして、道玄坂・文化村通りをメイン会場に開催されます。まさに、南九州最大の「おはら祭」を東京・渋谷での再現です。

「渋谷」と「鹿児島」の縁(えにし)は古く、鎌倉時代に渋谷氏が所領を得て、一族をあげて薩摩に移住したとあります。「渋谷・鹿児島おはら祭」も、その流れをくむ「ふるさとへの思い」を強くするお祭りで、当時の渋谷区長と鹿児島出身の経済人のご尽力で平成10年4月に始まった踊りパレードです。

毎年、私は見る専門・妻は連に入り踊りを楽しんでいます。

今年は記念すべき第20回大会で、54連約2,500人が参加し、渋谷道玄坂、文化村通りを、沿道の顧客と一体となり埋め尽くしました。妻が属する東京奄美会女性部は、グランプリ賞を受賞しました。



松姫～^{けいそう}勁草のごとく～

宮河 悦子

ふるさと在京会津高校同窓会の「会津歴史探訪の旅《会津松平家の祖・保科正之公生母お静の方を庇護した松姫の足跡を訪ねる》」に参加したのです。

「松姫の一生」の著者・中村彰彦先生も同行しました。この歴史探訪の旅は、武田家滅亡の時、武田の血筋を絶やしてはならないとの、高遠から八王子までの逃亡の足跡を辿る旅でした。

武田信玄の側室となって勝頼を産んだ諏訪御料人の死から六年後、甲州一の美女と言われる側室油川夫人との間に、新館御料人と呼ばれた松姫が信玄の五女(末娘)として、甲府の躑躅ヶ崎館で産まれたのです。

美しい少女となった七歳の時、織田信長の嫡男信忠に嫁ぐことが決まりました。信長の姪が養女になって勝頼のもとに嫁いできました。男児信勝を出産後病没してしまいました。

信玄は三方ヶ原の合戦で徳川家康に勝利したのですが、信長の武将二人に率いられた三千の兵力が家康に加勢し、そのうちの一人が討死にしまったことをきっかけに、武田・織田両家は事実上の絶交状態におちいり、松姫と信忠の縁談も立ち消えになってしまったのです。

信玄は体調急変し、伊那の駒場まで兵を引いた所で息絶えてしまったのです。勝頼が家督を継ぎ、躑躅ヶ崎館は戦国の世には戦えないと判断し、甲府の北西の台地上に新府城を築き、家族や重臣たちと新府城に移ったのです。

松姫は母を同じくする仁科盛信(信玄五男)の城、高遠城に居を移したのです。



武田神社全図



武田神社(躰躰ヶ崎館跡)

美濃路へ通じる木曽路の通行権を握る存在であった木曽義昌が、勝頼を見限り信長に味方することになって、木曽口から伊那口へ向かうのは信忠で、許嫁であった松姫のいる高遠城をはじめ、伊那谷にある武田方の諸城を目指して進撃することになったのです。

迫りくる織田軍。盛信は松姫に三歳の督姫を託し、自分達夫婦は高遠の土になる覚悟を定めたから、いずこかへ逃げ、いずれ武田の家の再興を頼むと、盛信夫人の『桜花の衣』を形見として持たせてくれたのです。

松姫は諏訪の勝頼の本陣へ、幾つもの峠を越えて向かったのです。その一行に陣場に参るに及ばずと使いが来たので新府城へ入りました。

勝頼の正室北条氏政の妹は、城が落ちる時は勝頼のお供をして旅立つ覚悟だから、四歳の貞姫を連れて行って命を永らえさせて欲しいと。武田家の筆頭家老小山田信茂夫人からも四歳の香具姫も連れて行って欲しいと。

松姫が三人の姫を連れて笹子峠を目指して新府城を出たときの供は、松姫付きとされていた十余名の侍の他、わずかな侍女と駕籠方の者だけでした。



信玄の正室三条夫人から産まれた信親は、生まれつき盲いで龍宝という法号を持ち、入明寺に身を寄せていました。松姫は異母兄との最後の別れになるかもしれないと、入明寺を訪れました。武田家滅亡の折、信親は自害して果てました。

その後松姫は勝沼から塩山の向獄寺に滞在し、迫りくる戦雲の行方を見定めようとしていました。

織田信忠軍が高遠城を包囲し、城攻めの開始を発令したことは、高遠城の籠城者たちにとって、この一日が今生における最後の日。約三千の守兵たちは謡や小唄舞を吟じ、持ち場を離れ親しい者と会って酒を酌み交わして決別の宴を開いたのです。

およそ二十倍の兵力に城を囲まれた守兵たちが、ここまでまとまっていたのは、城主盛信の人徳で、戦史の中では稀れであり、後に高遠合戦と呼ばれ伝説となってゆく戦いが開始されたのです。



高遠城址

諏訪の陣屋から新府城に戻る勝頼の兵は、逃亡する者が後をたたず、一千足らずの兵力になっていました。高遠城の落城を知った勝頼は、小山田信茂の居城に逃げ延びることにし、妻子を連れて先に立ち戻った信茂の出迎えは、大善寺に辿り着いてもなかったのです。

この歩みの途中で逃げだす者が相次ぎ、士分の者は四十一人、女は五十人しかいなかったのです。勝頼は鶴瀬に引き返し山坂から間道を進んで、笹子峠の手前田野に入ったが、小山田勢が笹子峠の峠口をふさいでしまったので、勝頼の正室の実家北条家の相模に逃げる事が出来なくなり、田野の山中に潜伏することになったのです。

織田勢の攻撃の中で勝頼は、正室と共に腹を切り非業な最後を遂げたのです。小山田一族は信忠と甲斐善光寺で対面する前に、信長の厳命により武田家重臣たちの返り忠(裏切り)は一切認めないと、一族皆殺しにされたのです。

後世、明智光秀・小早川秀秋らと共に、裏切り者の代表格に数えられることになる小山田信茂です。



甲斐善光寺



恵林寺

松姫一行は信玄の墳墓の地でもある恵林寺が、焼き打ちされると、向獄寺を後にして笹子峠を越え相模の国へ落ち延びたのです。

武田家滅亡の三ヶ月後、松姫はこの地で信長・信忠の本能寺の変での慙死を知るのです。

松姫は八王子の心源院で、信松尼として仏弟子になりました。

この頃武田家の旧領地甲斐・信濃の二カ国を、領国の一部としたのは家康でした。勝頼の最期の地となった田野の草原に残る散乱した遺体を、「名将・勇士の亡骸を捨て置くべきにあらず」と宣言。遺骨を埋葬したばかりか、生前の信長に黙って武田家遺臣団を八百九十五人も召し抱えたのです。

領土の経営や軍法の面で、信玄の手法を長く参考にしてきたからなのです。武田家の軍装を徳川家の或る武将とその配下の者たちに模倣させることができました。今年の大河ドラマの井伊直政が、家康から「軍装を赤備えにせよ」と命じられたことは有名です。

家康は女性について「裾貧乏」と言われ、性欲の強い好色な男でした。甲州在陣が長引くにつれ、「甲斐の女狩り」と呼ぶ行動を恥じなかったのです。武田家の名将の血を引く女子であれば、名将となる子を産んでくれるだろうと。特に信玄の血を引く松姫を所望したのです。高遠から行動を共にしてきたお竹に続いてお都摩が、信玄六女と偽って松姫の身代わりになって、家康の側室になったのです。

月日は流れ家康は征夷大將軍に任ぜられ、江戸幕府を開いて名実ともに天下人になったのです。五人の息子たちを大藩に封じ、徳川家の親藩を創設させました。五人の息子の一人が松姫の身代わりになったお都摩の局の産んだ、家康の五男武田七郎信吉です。

信吉を常陸水戸十五万石の藩主に配したのです。まもなく信吉は病に伏すことになり、帰らぬ人となりました。信吉に子はなく、せつかく創出した親藩としての武田家を、断絶させねばならなくなりました。その結果、水戸藩を相続することになったのは、家康十男の頼宣でした。

三人の姫たちで、勝頼の忘れ形見の貞姫は、足利家の血筋の宮原勘五郎の正室になり、盛信の息女の督姫は仏弟子として生きていきたいとの志で出家、小山田家の香具姫は上総佐貫藩主内藤政長の世子忠興の側室としての道が開けたのです。特に勝頼の血筋が宮原家に受け継がれていったのです。

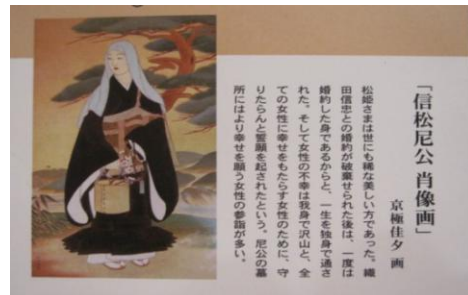
家康は採用済みの武田家遺臣団のうちから二百四十八人を選び、八王子に配し千人同心屋敷を造り、甲州金山からの黄金を運ぶため、甲州街道の整備拡張に力を注ぎました。武田家に金春流の猿楽師として抱かえられていた大蔵大夫の次男の大久保長安が、八王子の代官頭を命じられたことは、結果的に松姫を助けることになったのです。

松姫は御所水の里から八王子の横山宿に移り、長安の計らいで桑の木を育てる畑・糸取り部屋と機織り部屋のついた養蚕所を建て、草庵・墓所を造成したのです。多摩で養蚕が流行りだしたのは、『甲斐絹』が甲州から運ばれて売りに出されるのが、八王子辺りであったことが影響しているのです。

盛信夫人の形見の『桜花の衣』も『甲斐絹』で織られていて、その甲斐国から逃れて八王子で養蚕を始める松姫には、不思議な定めと感じずにはいられなかったと思うのです。



松姫像



松姫肖像画

松姫の逃避行について長くなってしまいました。

保科正之公生母お静と松姫のことは、またの機会にということで、今回の歴史探訪の旅では、知らなかった新府城址・恵林寺・甲斐善光寺・大善寺・高遠博物館・高遠城址・産千代稻荷神社・信松院などを現地の歴史研究会の方に説明して頂いて、深い歴史と武田家と会津の縁を知ることができました。

松姫は八王子に養蚕と機織りを広めたことから、『八王子の織物の母』と言われています。八王子が『桑都』という別名をもつこと、市内の小学校で蚕を飼育するのが日常化していることなどは、松姫の存在なしには考えられないことです。

信松院の門前の通りは「松姫通り」と呼ばれ、八王子のゆるキャラは妖精の「松姫マッピー」なのです。そのゆるキャラの目的は、松姫の全ての女性に幸せをもたらす女性のために、守りたらんと誓願を起されたというご遺志を継いで、八王子をハッピーにすることにあるということです。

勇敢で苦境にあっても慈悲深く、戦国の世を生き抜いた松姫という素晴らしい女性に出会い、心の中が豊かになりました。それと同時に、武田家に嫁いだ城主の夫人たちの、夫と共に果てた生き様に、もう少し夫を大事にしなければ、とも思いました。

しかし、いかなる時代であっても、戦争は悲しいことであると思うのです。題材の勁草は、古代中国の史書『後漢書』に「疾風(しっふう)に勁草(けいそう)を知る」という表現があるそうです。激しい風が吹くことによって初めて、折れない草が見分けられる、ということなのです。苦難や大事件に遭遇したとき、初めてその人の意志や節操の強さがわかる。という意味で使われるそうなのです。

松姫も甲府の躑躅ヶ丘で大切に育てられ、一時は織田信忠と婚を約し、側室として迎えようとした徳川家康を拒み、一族滅亡の悲運に堪えて、三人の幼い姫たちを自力で育てゆく間に、美しい花から疾風に折れない勁草へと変わって行ったのです。

松姫の葬儀には、八王子千人同心となった武田家遺臣たち、養蚕・機織り・染色の手伝いで収入を得ていた近在の男女までが、集まったのだそうです。

美しい心根の人の所には人が集まり助けてくれるものなのです。

(疾風に折れぬ花あり 中村彰彦著から一部引用)

けいそう【勁草】:〔後漢書 王覇伝〕

風などに負けない強い草。また、節操・思想の堅固な人のたとえ。

隠岐流人秘帳(その8-1)～ 後醍醐天皇 ～

松本 良樹

元弘2年(1332)の早春——。おごり高ぶる鎌倉幕府を倒そうとの後醍醐天皇の計画が鎌倉方に漏れたため、北条高時の兵は、怒濤の勢いで京を席卷した。

かくて、承久の乱以来111年目に、再び天皇が島流しにされるという、歴史的な大波乱が起きたのである。哀れ皇位を追われた天皇は、3月7日京をお立ちになり、同13日出雲見尾(美保関)にご到着、美保では仏国寺にお泊りになり、ここで数日隠岐行きの風待ちをされた。

その時のお供は、一条左近衛中将行房・六条右近衛少将忠顕・成田小太郎などのほか、女性では、三位殿御局廉子・大納言の局・小宰相の典侍・白妙ら一行全部でおおよそ10人足らずであった。

だが、殺気立つ鎌倉勢の監視は特に厳しいもので、陸路は勿論のこと、美保関からの船旅も、速舟など約200隻あまりのおびたしい船団を繰り出し、天皇の御座船を取り囲み警固にあたった。(『船上録』)



ここで、後醍醐天皇の隠岐での行宮が、当然問題になるわけだが、いま島には島後国分寺説と、島前別府黒木説との二説があって、過去70年来の対立が続いており、一応の説明を要する。しかし本編は、最初から史実に伝説を取りまぜて編集したものである。中央文献に対する『解釈の仕方』はしばらく後回しにして、ひとまず島に残る史実と伝説から入ろう。(行宮問題は別に、すべての文献と、最近島で発見された新資料なども加えて、あらゆる角度から取りあげ、読者の批判と検討を願うことにする)

昔から流人分けをした西ノ島、別府港に天皇の御座船が着いたのは元弘2年(北朝年号では正慶元年)3月23日で、後醍醐天皇は同村坪の内、近藤与次郎の家に一泊された。(西ノ島宇賀地区、宇野家譜『諏訪丸景古譜記』)

この当時、隠岐の守護職だった隠岐判官佐々木清高は、行宮造営を急いだが、良材を選ぶ暇はなく、ありあわせの立木を切って急造のバラックを建築した。ために島人はこれを黒木御所と呼ぶようになったと伝わっている。また一説には、当時この黒木山は一面雑木林であったところから黒木御所の名称が生まれたとか、いずれにしても、島では雑木のことを“くろ木”といい、黒木御所とは、つまり雑木の宮という意味で、粗末な御所と解釈していいだろう。(黒木御所は佐渡にもある)

そんな具合だから、その行宮は後鳥羽上皇の場合と同じように、酷いものだったらしい。しかし、その行宮は三方海に囲まれ、一方だけが山続きという脱出の監視にはうってつけのところである。

山側には佐々木氏の館があり、海には見附島と呼ぶ小島があつて、ともに天皇の脱出を警戒できる。また付近には局屋敷、坪の内など由緒ある地名が今も残っているが、限られた地域に禁足されていた天皇は、この小さな丘の上から寂しく海を眺められ、船の行く末をご覧になっては遠く都をしのばれたのであろう。

こころざす かたを問わばや 波の上に うきたただよう あまの釣船
(『増鏡』)

すまのあま 浦こぐ舟の 楫(カジ)をたえ よるべなき身ぞ 悲しかりける (『続

などの歌を残された。

また今に伝わる島の古い民謡“どっさり節”に、『忍び出ようとすりゃ 島奴がつける。まだ夜も明けぬに ガオーガオーと 憎や八幡の森鳥 …… 』というのがあるが、八幡の森は行宮のすぐそばにあって、監視兵がいたと伝えられており、天皇の当時の心境を島人がうがったものといわれている。

日々、厳しい監視を受けられた天皇は、もんもんのうち流人として島での一年近くを過ごされたが、その間1日も島からの脱出をねらわぬ日とはなかった。これは先帝 後鳥羽上皇のこともあって、その二の舞を踏まぬ堅いご決心だったことは当然察しがつく。

また中央の情勢も、後鳥羽上皇の場合とは大きく相違していたのである。天皇のご脱出当時の模様については、『太平記』『楠公一代記』その他の文献にも明らかだが、島人は後鳥羽上皇事件以来、皇室に対する関心がかなり強く、いわゆる勤皇党が多かったようだ。

特に神経質になっていたとさえ思えるほどの、物々しい警戒網の中から逃れ得たのは、土地の豪族近藤一族・村上家などのほか、島外の宮方武士・成田小太郎、伯耆の名和悪四郎泰長らが緊密な連絡を保ちながらこの“世紀の脱出”を成功させた。

当時の中央情勢は、大塔の宮が吉野に拠って旗揚げしたが失敗に終わった。しかし楠正成は金剛・千早城にあって健在だったし、赤松円心・児島高德その他の宮方武士は、中国・四国・九州にそれぞれ蜂起しつつあり、世はようやく騒然となっていた。そこで京の六波羅は、中心人物である後醍醐天皇の隠岐行宮を重視、佐々木清高だけでは警備に不安があるとして、佐々木富士名判官義綱に対し、隠岐行宮の中門警固をするよう命令した。

任についた義綱は、行宮警固にあたるうち、都でも珍しいほど美貌だったといわれる官女の白砂に心を惹かれるようになった。このことは、再起をねらう後醍醐天皇には何よりも大きな幸運だった。

早くも義綱の心を見ぬいた六条右近衛少将忠顕は、官女の白砂を義綱にやり、彼の機嫌をとっておくことを天皇に奨め、その承諾を得た。

ある日、忠顕卿は義綱を行宮に呼び、禁衛(皇居守護)の賞として、天皇から白砂を差し遣わすとの沙汰があった旨を伝えた。義綱の喜びようは大変なものだった。そして早速白砂を自分の館に引き取りようとしたが、ことは簡単にゆかなかった。それは前任の佐々木清高も強く白砂に執心していたからである。時に白砂は16歳であり、彼女は『はらはらと、こぼれかかった鬢のほつれから、かすかに見える眉のにおい、芙蓉のまなじり、牡丹の花に似たくちびる、どんな聖人でも心迷わさないではいられない』ほどの美しさだったと伝えられている。

この白砂が、義綱に与えられたのを聞いた清高は、ひどくこれを妬み憤った。そしてついに義綱を暗殺して白砂を略奪することを計画した。しかしこれは、家臣の浅山六郎重勝に強く諫められ、一応思いとどまり浅山からの策を入れ、謀をめぐらしたのである。

その頃、出雲の守護信濃の守・近江守・隠岐守兼検非違使の佐々木高貞は、義綱の兄(いとも言われる)であったのを清高が利用して、『御舎弟義綱殿は、このごろ鎌倉殿に背き、後醍醐天皇の見方をしようとしています。その証拠に最近義綱殿は官女白砂を賜ることになりました。これは、お家のために宜しくないと考えられます。万一このようなことが鎌倉殿に知れましては、ご一族の破滅は必定。今のうちに義綱殿を出雲にお引き取り下さるなら清高が諸方、万事うまく納め、御所には義綱殿ご病気とでも触れ、よろしく取り計らいましょう……』との密使を出雲に送った。

驚いた高貞は早速義綱に飛札で、『急々に対面したいことがある』と申し送ったのである。取るものもとあえず、急ぎ出雲に立ち返った義綱は、清高からの書状と伝言を示され怒りに震えながら言った。

『白砂を賜ったことは帝のご奉仕で事実だが、帝を取り立てるなどとは偽りも甚だしい。清高奴、かね

て白砂に心をかけていたと聞くゆえ、私を罪に落とし、白砂を奪わんとする計画である。これから早々隠岐に立ち帰り清高を討つ』しかし、これは高貞公になだめられて果たさず、そのうえ彼は出雲に引き止められてしまった。

一方清高は、こうして一時的に目的を達したが（白砂は後、高貞夫人となった）、家臣の浅山重勝は、何らの恩賞も得られず内心非常に不満だった。そこで主人清高に対する不満もあり、また天皇脱出に協力することによって大いに恩賞にありつこうとしたのである。

元弘3年2月23日夜、浅山はひそかに行宮を訪ね、鎌倉方で天皇暗殺を企てていること、中央情勢が宮方に有利に展開してきたことなどを説明、直ちに伯耆に玉座を遷すことを勧めた。そして『今宵は私が警固番だから一日も早く……』と行宮の門を開き脱出の手引きをした。（後日、船上山の合戦にも出陣している）（『朝山家記』）



このようにして、天皇はやっと脱出し得たものの、暗夜のこととて道に迷った。忠顕がある家の門をたたき千波（チフリ）港への道を尋ねたところ、内から屈強の若者が出てきて、一行の有様を見守っていたが、若者は黙って天皇を軽々と背負い、間道ずたいに美田湾まで行き、そこにあった小舟で千波港まで案内。港に碇泊していた帆船に話をつけ伯耆の国に脱出できるように手配した。しかし、間もなく隠岐判官清高の速舟に追われ危ない一幕もあったが、ことなきをえ命からがらでやっと伯耆の御来屋の港についた。（『太平記』）

と、ここまでは隠岐出身の近藤泰成氏 隠岐流人秘帳頼よりの転載です。

明治になるまで隠岐の人は、後醍醐天皇の行宮は、島前の西ノ島別府港にあったと誰もが信じていましたが、突然中央の学者から『島後の隠岐国分寺が行在所』という説が出され皆が驚きました。

その論拠は『増鏡』『太平記』『鰐淵寺の僧頼源の譲り状』三書を根拠として、島後の国分寺が行在所となり、結局、昭和12年島後の国分寺が、文部大臣の史跡指定を受けました。

島では昭和12年までのおよそ600年もの間、信じて疑う者もなく子々孫々伝えてきたことが嘘だったと宣告され、島人にとっては青天の霹靂だったことでしょう。

さて、この論争の決着は次回の『（その8-2）後醍醐帝の行宮』に掲載しますので、乞うご期待です。

～つづく～